

教育家の老年像 (その1)

— コメンスキーの高齢期学び論 —

土 橋 寶

(2003年9月30日受理)

Das Bild vom Greisenalter im Klassiker der Pädagogik, Erster Teil

— J. A. Komenský über das Lernen des hohen Alters —

Takara Dobashi

In diesem Aufsatz betrachten wir zuerst die Gerontagogik Jan Amos Komenskýs, die in seinem späteren Werk "PAMPAEDIA" abgedruckt ist. Nach Komenský ist die Welt als eine Schule zu sehen, und der Mensch muss von der Geburt bis zum Tode an durch Lebensläufe hindurch und in dieser Schule lernen. Von ausserordentlicher Wichtigkeit ist sein Entwurf der "Schola virilitatis" und der "Schola Senii". Am Ende des eigenen Lebens müssen alte Menschen in der "Schola Mortis" die Kunst lernen, "gut und selig zu sterben", um ins ewige Leben eintreten zu können. Dies ist eine originelle Erkenntnis seiner Gerontagogik, und sie ist auch für uns moderne Menschen sehr bedeutsam. Aber die Absicht der Pampaedia liegt noch weiter in der Tiefe. Komenský lehrt uns nicht nur das Leben als Weg des Lernens zur Weisheit und Erlösung im ewigen Leben zu verstehen, sondern betont auch, daß alle Menschen lebenslang bis ins hohe Alter das sozial nutzbare Lernen zum Weltfrieden fortsetzen können.

Key words: schola senii, sapientia, chresis

キーワード：老年期の学校，知恵，有用（有益）

はじめに

『大教授学』や『世界図絵』で近代教授学の礎石を築き、単線型学校体系論で統一学校運動の先駆的思想の持ち主として高く評価されるコメンスキー (Jan Amos Komenský) の著作『人間に関する事柄の改善についての総勧告』(以下『総審議』と略記) には、新たな教育学の展開がみられる。「すべての人に、すべてのことを、すべての面にわたって」教える「汎教育」(Pampaedia) で注目されるのは、「すべての人」の範囲が「すべての年齢段階の者とあらゆる能力の人」にまで拡張されていることである¹⁾。その教育対象年齢は、老若男女、貧富、身分、民族の差を超えた「すべての人」であるが、また「子どもの時にも成人においても学習すべきである」(Pp, VII, 16) と「年齢段階」の洞察から生涯すべてが改めて教育対象に加えられている。「汎教育」の主題は、いわば発達段階

論の視角で「生涯にわたる教育」を構想する事にあるといえよう²⁾。誕生以前の学校から壮年期の学校を経て「老年期の学校」(Schola senii)、「死の学校」(Schola mortis) に及ぶその学校系統論は老年教育学 (Gerontagogik) の重要な研究対象ともみなされている³⁾。本論は主にその汎教育の思想の主題をなすこの生涯教育構想を、就中老年教育論、殊に学び論の角度から取り上げ、生涯発達のための教育論の所在をそこに確証する仮設的試論である。

ここで指摘しておきたい問題の所在は二点に整理される。一つは、世界を学舎と、人生全て (生涯) を学びとみなす汎学校論 (Panscholia) の存在意義である。

今でこそ成人教育、生涯学習と関連した Andragogy や Gerontagogy の発展が見られるが、この学校論にはいかなる学びの原理とこれに基づく発達段階論が構築し直されているのか。学びの対象年齢の拡張は、少なくとも高齢まで人は学習し得ること、年齢段階固有

の発達課題、学習能力と陶冶可能性の存在を予想させるであろう。二つ目は、その汎教育の学校階梯論における老年期の学校の教育目標と内容の特徴である。彼の教育思想から帰結される教育の目的は今日的な人格理想としてその意味を取り出してみれば、知恵の所有者＝賢者としての人間像の思想的な類型の表現とみなしてよいかも知れない。「汎知学者」の陶冶、教育の背景にあるのは、むしろ生涯を通しての「知恵」(sapientia)の学びによる賢者の陶冶、教育という西洋古代の文化的伝統につらなる教育論である。それが彼の『汎教育』においては「すべてのこと」という普遍性(汎知)を指向する教授学の展開の下で、老年教育ないし生涯教育という発達を含意した教育の文脈で一層深められている。以上の点は、高齢期の学び論として検討し得る余地を十分残すものである。

I. 老年の諸相

(1) 老年解釈の今昔

歴史を顧みると、老年の解釈には幾多の変遷があることが窺われる。まず主にパルース(Radim Palouš)の所見に依拠し、老年解釈の昔と今を素描しておくでしょう。

かつて身体強健や可動性を生活上高く評価した狩猟民、遊牧民の文化には、農耕定住民族と異なる厳しい老人像があった⁴⁾。モンゴルのことわざには「穀潰し」「穴のあいた米の袋」などの否定的老年像がある。それは老人を役立たずの無用の物、厄介な廃物の如く見なす野蛮な老年像である。それが中国史では「全然老人を敬わない社会」と表現される。一方、中国、日本、南アジアの国々の文化では、総じて高齢者は尊敬の対象であり、その名誉が重んじられた。人々は貴重な忠告、助言を仰ぎ、老人を丁重にもてなした⁵⁾。古代ギリシャでは、文明の基礎は長老政治⁶⁾であった。老人の忠告に支配者の役割を認めたユダヤの文化伝統を受け継ぐ中世も老人礼賛の時代であったといえる。だが、教会の階級組織への反乱による改革の起きた近世以降成人愛好の傾向が強まった。いわば狼道徳が社会の趨勢となるのである。それは人生の価値を、個々人を自己保存の能力をどれだけ有するか、どれほど所与の社会をつくる権力の目的に役立ち得るかの基準で評価する。生命の価値は、生産性の有無による。生産性を準備し生命の頂点に向かう青春は大事にされる。一方、活力を失い若さを失う老年は衰退と分解の時期ゆえおぞましいものでしかない。青年期の進化、老年期の退化、この上昇と下降の放物曲線⁷⁾を描く人生航路は近代産業社会の生産主義的思考においてはさらに減

退、弛緩、萎縮、崩壊等の意味を重ねた一本線の隠喩(鷲田清一)で捉えられるに及ぶ。

今日老年学や老年心理学の見解では、おおかた身体の諸器官や心理全体の退化、老衰が老年の本質特徴として前提される。このエイジングの医学的意味としての老化の障害の強調に対する防衛策は、「老いに負けない」アンチエイジング⁸⁾であるし、差異性仮説である。後者では青年期、成人期等と異なる独特の感じ方をし、固有の体験様式を持つ老年期が強調される。人間の能力でも身体的能力、運動の能力は減退するが、言語能力、課題解決、判断や推理の能力は、成人期以降にも衰えないことが知能のテストで実験的に証明される⁹⁾。また中高年の知的有能性の実証的な確証は生涯発達心理学の研究でしばしばなされている¹⁰⁾。肉体的衰退に働く補償の心理から、精神力が高まることも老年学ではよく知られる事実である。知的創造の活力はなお衰えを知らないとする楽観主義的なバージョンは確かに高齢者や中高年世代を元気づける科学的寄与ではある。

いずれにせよ現代人の「老い」の像はやせ細る傾向にある。老人は、生産性を基軸とする社会で、学校教育を受け取るのと同様の意味で老人福祉の制度から専門機能としてのケアを受け取る機能を果たす存在になっている¹¹⁾し、そこには特定の老年像の他律的強制的性格もみられるのである。

(2) 幸福な老年の処方箋

老後の生き甲斐と幸福を促す生き方上手の勧めにも幾つかの見解がみられる。たとえば、壮年の業務中心の活動的生と不均衡を回避する生涯現役論が説かれる。これは「若い者に負けず」、若き頃からの仕事に没頭し、病的徴候を隠して顧慮せず「それでもなお」若々しく生きることを提唱する活動論である。だが、以前目指した目標をなお追求しこれを維持するのは、死に近い老年にはかなわぬことであろう。

また老年を自足、円満具足の境地として肯定的に意味づける老年像もある。いわば悠々自適の境涯は、物質的条件が解決されれば、仕事なしの業績や評価に拘わらない安楽を特徴とする。そこでは老化を自足して生きる手管が説かれることとなる。引退し気楽に暮らす人生、これは現実生活からの隔離論というよりも、「隠れて生きよ」(エピクロス)の倫理的な快樂主義の性格を有する老年像でもあるだろう。ただ永続の自足の生活がさほど容易でない限り、その骨折りはいささか無駄になりもする。これとは反対に、自足のための処方箋を老いの受容に認めるストア主義の禁欲説もあるだろう。意志と禁欲で老いる自己に順応すること

の勧めである。だが、ポーボワールによれば¹²⁾、苦痛、疾患、老いとかを明澄な心で受け入れよと説く道德、この状態を勇敢に耐え忍ぶことは我々を偉大にする方法だから、年老いた人間はこの投企に従事してもよいと説く道德論に対して、老いを身に被ることは活動を意味する投企ではない、成長、成熟、老い、死、この時の推移は宿命なのである。老いを人生の哀れなパロディーにしないためには、人生に意義を与えるような目的の追求の他にない。だが、それは少数の恵まれた人にしか付与されない。そこから関心は生涯人間として扱われ得る社会に向けられる。

現代の老年観はそれ以前の年齢時期と比較して老年を欠損ととらえる前提から出発する傾向がある。そこでこの同情されるべき廃嫡子の宿命を軽減するための、個人的社会的欠損の最大限の補償が、老年学等での関心事を占めることとなる。

また老年の生活支援の制度的枠組みは、高齢者を人間的責任の最後の段階、老年への深い尊敬に導くものでは必ずしもない。むしろそれは近づく終末の呼びかけ、死の関与とそれが人間的に肯定的意味を持つことをないがしろにする方に向けられてはいまいか¹³⁾。老い先短い高齢者には陶冶も教育も無用だ、必要事は、享楽と楽しい余生の最後の可能性をこしらえることだけだ。少なくとも、かかる老年像からは、生涯発達の視座での老年教育も、高齢者の人生成就のための学びの意義すら看過されるおそれなしとしない。

II. 老年期の学校 — その教育目標と内容 —

(1) 学校としての世界、学びとしての生涯

この世での人間の生の目的は、コメンスキーによると来世の永遠の浄福にある。地上の生はこの永遠の生命に対する段階的準備をその本質とする。この準備をなすのが学校である。すでに『大教授学』に、はっきり書かれている。「…この世界は、私たち人間の苗床であり、私たち人間の保育室であり、私たち人間の学校であって、…このことから、現世の彼方にもっと大切なものがあることになるのですし、私たちは、あの現世の学校のなん年かを終わって、そこへ進むわけです。いいかえれば、それは、永遠という大学なのです。」(Dm, III, 3, 21 以下鈴木秀勇訳に拠る) 来世の「永遠というアカデミア」に入学する準備をする場が「下位の学校」としての現世である。老年はこの現世の生の一部であるから、その準備をする学校の一部、ひとつの学校にほかならない。勿論下位の学校の中でも、「老年期の学校」は「究極で、最上の学校」であ

る。なぜなら老年期は、「人間の叡智の頂点」であり、「生命の享受」の時期であるからである。(Pp, IX, 1) 人生の完成と将来への備えのため、この老年期にも「教師、規則、課題、訓練」がなければならない。汎教育のこの学校体系論を成り立たせるのは、「あらゆる年齢が学びへと定められている。それ以外の意味を人間の一切の生と、努力すべてはもっていない」(Pp, V, 1) とする人間観である。少なくとも今日的意味での生涯、誕生から死までの各時期の本質は首尾一貫して学びにある。この新たな視座の下で人生全体が誕生以前、幼児期、児童期、青年期、若年期、壮年期、老年期に7区分され、「人間の段階的完成」のための学校制度も、『大教授学』のように若年期の学校=大学で完了とされる事なく、大幅に見直される。「個人の管轄」である「壮年期の学校」「老年期の学校」があり得ると考えられる。因みに「壮年期の学校」と目される場はいわば世の中、社会生活全てである。また「老年期の学校」は高齢者がつねに暮らす至る所にあるとされる。なぜなら年齢相応に進歩した高齢者は、幸せは自分からつくれるし、神と自分自身にだけ任せてよいからである。(Pp, V, 7)

このように誕生以前の学校や「死の学校」まで構想される彼の学校系統は、背景にある彼の宗教的人生観と不可分である。むしろ注目されるのはその理性的次元の人間理解であろう。彼の救済観にせよ、一般のキリスト教信徒の救済論と比べてみても著しい差異がある。というのは、彼の場合来世における永遠の浄福は学びに制約されているからである。すなわち「永遠という大学」の学びなくして魂の救い、永遠の浄福は成り立たないとされるからである。そこに窺われるのは、人間の使命を生を超えて教育にあるとする人生観、いや学びに定められた人間という教育的人間観である。コメンスキーにとって人間の生涯はその意味でつねに学びにある。「あらゆる人間にとってゆりかごから墓場まで全生涯は一つの学校である。セネカのいうように、学びにとって遅すぎる年齢はない、とするだけではまだ十分ではなく、あらゆる年齢が学びに定められている」(Pp, V, 1) と彼はいうのである。このように限りなく学びが可能であるとすれば、壮年期から老年期にかけて人間的能力はなおかつ育成さるべく発達を遂げるという陶冶可能性、発達の教育観に彼が立っていることが推察されよう。世界を学校とし、生涯を学びとみる彼の汎教育の理念は老年期とその学習もユートピアとせず極めて現実的に理解する。

(2) 老年期— その危機の様相 —

臨床医学の現場から知られる老いの現実は今危機

の深刻な様相を呈している。諸価値や親密な人の喪失体験に遭遇し、その心に、空虚感、孤独観、希死念慮、疎外感、離人体験、無常観、厭世観、無価値感、絶望感、後悔、罪悪感、生きがい感の消失、自己不安感、被害感、猜疑心等が生じる¹⁴⁾。では、老年期はコメンスキーにとっていかなる現実と把握されるのか。

老年期はまず「生命の最終の、衰えてゆく部分」にして「死の隣り」(Pp, XIV, 1)である。「老年は一般に最も脆弱な年齢段階とひとびとに見なされる」。勿論ただ単に「身体が衰弱するだけではなく、魂も老衰する…というのは人間の運命である」(Pp, XIV, 4)。最も厳しい現実には、「老人たちが近づくと、生から死への移り行き」であり、「それ自体怖いこと」である。「なぜなら全ての怖ろしい事のうちに、死が最も怖ろしいからである。このことはただアリストテレスが証言するだけではない。生ける被造物の全ての一群も証言する」(Pp, XIV, 6)。

コメンスキーも老年をその危機の様相で理解する。ただ、彼にとって老年が人間に危機であるのは、肉体の生理的機能不全による健康障害を抱える事にあるだけではない。死に際して怖れねばならないのは、「肉体の確実な没落」だけでなく、「魂の無化」でもある。

人生は危険に遭遇する航海、また戦場にたとえられる。人生は「スキュラとカリュプデイスの狭間で砕け、或いは巻き込まれたりするような心配」(Pp, XIV, 6)が生じて当然なのである。「この世は海原の如く、人生は船のようだ、人々が述べるのは必ずしも不当ではない。海上にある限り、…没落の危険が脅かす」。また老年は、その「古き敵」の徘徊のみか「新たな攻撃」も甘受する年齢時期である。だから結局「人間の全生涯が兵役である」(ヨブ記7, 1)。人は常在戦場、「武器を手放さず、歩哨を捨ててはいけない」のである。

老年の重大な危機は、殊に「我々の人生の港」、終着点の「死」、この港の中で「難破を被る」事態である。この比喩は、それまで築いた全てが死を目前にして無益と化し、無駄になること、過ぎ去りし人生全てが無益に生きられたこととなる分かれ目、この重大な岐路を指し示す。収穫の時期に突然の嵐で収益を台無しにする危機でもある。この問題は、ただちに計画的な老年教育の必要性和存在意義を明らかにするものである。老年期はその人生での全ての営みの完成の時期であり、その仕事では最大限の用意周到さが求められる。予めこの年齢時期のための正しい指導が必要であり、かの生活全部を無駄に生きたことにならないよう用心する正しい方法を知ることが必要なのである。ただし老年期は、極めて脆い時期である。だから「弱いものは指導され支えられねばならない……それ故孤独

にし、支えなく放置されてはならない」(Pp, XIV, 3)。老人は固有の欠点をもつ。その習慣には欠陥が露呈される。こうした過ちには、無条件に救済の方策が設備され、この方策の正しい使い方の「教化」で装備されねばならない。「老人たちも自分で自分を助けることはできない」(Pp, XIV, 4)からである。

(3) 教育目標と学びの課題

老年期の学校の教育目標は、地上で「最高にして究極のこと」をなす事、それは「人間生活の一種の栄光に満ちた頂点、不死の生命の一種の甘美な序曲、最終的には永遠の生命への浄福な入場」である。同学校では次の三点を教育目標とし、これを「知る」「意欲する」「行う」全体的な人間性の陶冶としてめざす。

「I. これまで過ごしてきた人生を正しく享受すること。II. 人生の残りを正しく成就すること。III. 全地上の生を正しく締めくくり、よるこんで永遠の生命に入ること。」(Pp, XIV, 8)

老人の学校の目標は老化の状態に応じて区分された三学年の各内容に学びの課題の形で具体化される。

第一学年は、老年の入り口にあり、「まだ壮健の老年期」である。その内容は、「すでにかなえた課題、まだ果たしていない課題を考えてみる」ことである。この内容の領域乃至配列順序は、①今まで走り抜けた人生を正しくかなえること、自分の「過去」を振り返り、良くなされたものは喜び、まだ良い結果が出せていないものの改善を考えること、②次に「現在」を概観し、自分の人生の近い限界(一日の夕刻、週の土曜日、一年の収穫時期)を喜ぶこと、③まだなされずに残ることを捜し、その意図を実施する方法に向かうこと、④身の上にもふりかかる、起こり得る不幸な出来事に用心し、身をまもること、⑤病や苦に気をつけ、一層慎重に健康な生活法に配慮することと、される。

まず己の人生の過去に対してとるべき態度である。

過去の年齢段階で達成された自分の事業(作品)全ての良し悪しを自己評価し、悪しき行為には謝罪してそれをやめ、良き事業をもって償いをするのである。生前の行為に悪が善と混じる場合は、価値あるものを分離し、浄化することである。次は、人生の収穫期の老年の今現在を祝い寿ぐことである。ただ慎重さを欠く無為ではなく、遺された時を活動的にきちんとした仕事で過ごすべきである。だらけやしきじりで頓死しない引き締めと用意周到さが必要である。更に老年には慢心を避け、力の限界を超えた行為を過度にするのを避け、無思慮とむなしい希望に用心することである。老年は、その特有の不幸な事例に曝されることが多い。視力や悟性を失い、頑迷固陋、破廉恥、吹聴、偏屈、

愚行、背徳、背信に陥る。この危険を減らさんとして老人が行う賢明な行為は、生命の健康、良俗、良識を危険にさらす背景によく注意する場合に可能となる。たとえば食事の生活術を是正したセネカはそうした賢者の一人であるとされる。

こうしてコメンスキークによると、「老年は不治の病なり」(セネカ)の命題に対する結論であるが、確かに老年の弱さは避けられないにしても、食い止めるか、辛さから身を護ることはできる。(Pp, XIV, 25)

次の学年は、「高齢で苦勞の多い老年期」である。その内容は、人生行路の課題の完成、生の目標獲得に依然残されている事柄の一層熱意ある仕上げである。残された時を自分とその後進に有益であるように費すことである。高齢になればなるほど、老いた人はいよいよ「敬虔と道徳」を大事にしたり、「良き考え」に献身するが、それは自身の良心の維持とか獲得ゆえでなく、他者ゆえのことである。能う限り「知恵の真の生徒」、「国家の良き市民」を多勢遺産として残すためである。これを可能にするのは、老人がその終焉まで「徳の極めて明晰な鏡、秩序の最も堅固な支柱、全ての善良な人のため極めて熱心な警告者」となる場合しかない。(Pp, XIV, 27) 高齢といえども、仕事を控えて無為にすごしてはならず、「命の光ある限り働かねばならない。」殊に敬虔で知恵のある高齢者は、死の病を抱えて国政に尽力し、「立ったまま死すべく」働いた為政者のように、職業の実務についたまま死に追いつかれるのを望むような人格的信念が必要である。生涯の仕事が迅速に完成に至るには、ありとあらゆる方策が施されてよい。遅くならぬように途中で切り上げるのもよい。ただし老人は重大な事柄のみ果し、救いの事柄のみ語り、聖なることのみ思索すべきである。

老年の叡知に属するのは、「分別のある思索」である。「明敏さより信、あらゆる可能な知よりもその大抵のことの不可知、才知よりも無邪氣、雄弁よりも沈黙」が優先される。老年には一切の人間知の無効が明らかになるからである。永遠の財の確実な基礎を築くこの高齢者を手助けしてくれるのは彼によると、「汎知学の知識」である。それは文字通り高齢者を賢者として完成させるコメンスキークの意味での哲学的思索の勧めであるといえる。

なお高齢者の課題には「遺言作り」がある。本人の死後争いなきよう財産を賢く分配する方策がその内容であるだけではない。むしろ魂を主たる神にのみゆだね、肉体を現世に託して死後魂と肉体の両者の安心を得ることが重要な内容である。勿論なお寿命が有り難いことに延長される時は、以前から寄与してきた善を後進に伝え移植する努力、悪とは新時代のアトラスの

ように闘いその跳梁を封じ込める努力が求められる。

第二の段階の学びの内容は、このようにみると、社会に有益な仕事の完成であり、同時に徳と叡知で身をもって若い世代の育成に寄与する活動にあるといえる。高齢者こそ持ち得る忠告、警告の機能も看過されていないのである。

第三の学年は「衰弱した老年」の時期であり、「栄光に満ちた浄福な人生の末期」である。ここでコメンスキークは、西洋古代の賢者セネカやプラトンの思想から出発しこれを継承し自己の学び論に生かそうとする。老年末期の教育目標はまず「良く死ぬこと」と集約される。その課題は、生涯発達の視座に置き換え展開される。「若者として、どうしたらよく生きられるか、私は熟慮したが、今一人の老人になっているので、私はいかにして良く死ぬか、についてじっくり考える」

(セネカ)「完全な知恵」の現実化は、人間にとって究極の事柄、死に氣遣うことに基づく。確かに青年期には「感覚」に好ましい世の事物の新鮮さ、多彩な多様性に魅了される。だが、老年になると、思考は自己の生の「終焉」に向けられてくる。その可能性は、業務の喧噪が弱くなり、大抵のことに感覚がうんざりすることによる。過ぎしことの考慮よりは現在と近い将来がもたらすものの氣遣いが焦点的になる。かくて老人は、感覚に生きなくなるや、明確に死と対面するに至る。これは人生行路の自然の運行による所である。かくて老年の真剣なその思索は、「いかにして死を受け入れたらよいか」以外あるべくもない。彼によると、この課題ではプラトン『パイドン』の定義、「哲学は死についての思索である」が実に所を得ている。「なぜなら死ぬことを学んでしまうことは、哲学することの最良の部分であるから」。「良く死ぬため十分思慮をもて」(Pp, XIV, 13)

死ぬことは確かに人為のなすことではない。死は自ずと到来する。この点はコメンスキークも認める。「しかし良く死ぬこと、これは諸々の術のなかの術である」(Pp, XIV, 13)。ただ老人の良く死ぬことの学びは、「死ぬことを学び、死ねること」に満足してはならない。死を通して、「永遠性そのもの」の「究極」の区域に迫ることが最高の目標である。死は、生命とその活動の休止、即ち終焉をもたらすにとどまらない。死は、人間を別の所に移す。思考、願望、闘いの休止よりも永遠と不死の生命に向かう努力をもたらすものと、考えられている。

この時期の学びの課題はなにか。それは、「死を迎え入れ、死を同伴して不死の新たな生命に入ること」(Pp, XIV, 34) 術の学びである。その術の具体的な学習に「死を怖がらないこと」、「記憶力の衰え」への

対処が挙げられている。人は生れたのを怖くは思わなかったはずである。なぜなら知らぬままに「生まれる時、所、生まれ方」を選ぶのを自分の創造者に委ねたからである。決定権は自分の内にはない。誕生と同じく死も「神の御手」に委ねられている。だから「汝の死の仕事」も自覚して神に信頼して委ねるのがよい。故に死をいたずらに怖れることはない。神がうまく計らってくれることになるからである。記憶の衰える高齢者に有益なのは、せめて忘れるべきではないことを「外部感覚」に示して見せること、それは実物でも画像でも象徴でもよい。ここでは高齢者の朦朧とした意識から救済の出来事の記憶を鮮明に保つ教授法の工夫が例示されている。いずれにせよ高齢者にとって「ただ死ぬことの学び」ではすまされない。「良く死ぬことを学ばなければならない」(Pp, XIV, 36)。

高齢者の課題としての救済も、真実に生き、地上の人間たちよりも神、天使、物故者とのより一層の交際、地上の人間に「お元気で」といえるような永久の別れの方法として論じられる。それが「良く死ぬこと」の「術」、この術の実践の次元で説かれていることがわかる。従って彼の方法は、けっして入信の勧めなどではない。それは術の学び方を指向する所論である。

なお死の深淵はコメンスキーに拠ると、洪水に襲われたノアの箱船のように「信仰の箱船」「祈りのため息」なくして超えられない。従って、こうして死が間近にある人のなすべきことは、奇跡を待ち望む訳ではなく、祈りと哀願による神の慈悲への信仰の強化である。老人はこうして信仰と希望をもち主に身を捧げることとなる。それができてこそ、老人は死の中で勝利し、この勝利は永遠へと移行するものとなる。

ところで、老年期の学校に続く学校も構想される。それが「死の学校」である。「浄福な死」は「正しく過ごされた老年期」とは異なるもので、この「良く、かつ祝福を受けて死ぬ術」は敬虔な人の省察と考察に値するし、あらゆる年齢段階の人に必要でもある。叡知の完成としてのこの術の学びは、超越者ないし聖なるものとの結びつき、この宗教性を要件とするものであるに相違ない。

III. 高齢期の学び論

(1) 学習指導の過程—範例・規則・実践的応用—

老年の学び (exercitare) に、コメンスキーは初等教育の指導上の原理と基本的に変わらない段階を踏んだ教授内容と教授方法の原理¹⁵⁾を説いている。その学習の系統は、感覚→理解→意志→行動の連関で、実践ないし応用を重視した三段階で理解されている。「範

例」、「規則」、「実践的応用」がそれである。

まず高齢者は、「範例」(Beispiele, exempla) で学習する。この場合老年期の学校を賢明に終了した人々全てが、その「歴史的記録、書類」から知る限り、学ばれる実例、または模範例の対象とみなされる。人生の最後の舞台を飾る徳を最高度に所有した人々にはじつに輝かしい「範例」が見いだせる。「昔の族長時代、英雄時代或いは我らの時代からとられた範例」があり得る。(Pp, XIV, 16)

次に「規則」(Vorschriften, Praecepta) である。まず聖書は、永遠性に思いを致すよう促す意味で、この訓戒と良き忠告をさずけてくれるが、それ以上に他の「良き警告者」たちがいる。現に暮らす人々、或いは書物から語りかける人々がそれである。およそ規則とさるべき事柄を要約すれば、以下の3点になる。①この世を去るのを命じられたら、天国に入るための確実性を勝ち得よう、魂に配慮すること、②それから生涯の残余の課題を成就し終えている場合、肉体が苦痛や悩みなく安心して永眠し、墓中で安息を享受し得よう、身体に配慮すること、③死後の名声にも配慮すること。(Pp, XIV, 17)

更に老年を飾るいかなる徳からも疎遠にならぬように、その努力の全てを費やすように、「持続的な実践的応用」(beständige praktische Anwendung, praxis perpetua) の段階が必要とされる。高齢者は、肉体と世の中には冷淡になり、人生の些事を捨て置いても、自分と他者に有益になる真面目なことのみなすよう努力すべきである。行為と経験の豊かな高齢者はその「技量 (ars) の宝庫」を将来への備えに活用するのがよいのである。(Pp, XIV, 18)

このような教授の術、教育方法はいかなる学習論に基づいて成立するのだろうか。

(2) 学びの概念と知の構造

コメンスキーの『最新言語方法』(Methodus linguarum novissima, 以下 Mln と略記) によると、学びは教えと一体で理解されている。「教えと学びの活動においては、いつでもどこでも〈教え〉〈学び〉〈知〉の概念が現れる。…知とはそれが悟性であれ、手、言語をもちいてであれ、何かを模写することである。…」

(Mln, X, 6) 「学びとは、…何かを精神で模写する試みのことをいう。教えとは、ある人が知ることを、他の誰かも学び会得するよう働きかけることをいう。」

(Mln, X, 1) 未知の事柄との対面としての学びには、彼によると、指導者が必要である。過誤を避け、過ちを犯すものを連れ戻し、一定のレベルから落第するものを元の道に確保する指導者が学びを成立させる要件

である。G. Michel¹⁶⁾に拠ると、『総審議』の「汎知学」の一節では、「学びの理論, Mathetik」「教への理論, Didaktik」が、「自分の意識の指導」「他者の意識の指導」と規定されている。この両者に共通するのが、知の理論である。そのためコメンスキーは両者の章の間に「知識の理論」, 「知識学」(Gnostik)を挿入する。この知識論は、老年の学びと密接な関連を有すると考えられる。

さて、学びとは、ある事柄を知ろうとすること、教えとは、ある人が知ることを他者も知るように、働きかけることであるからには、知のこの理論が必要である。知の働きは、周知のように彼の場合三段階の構造をなす。まず事物が存在することの知から成り立つのが「知覚」である。その事物の根拠の知から成り立つのが「認識」である。さらに事物は何のために用いられねばならないかの知から事物の「実際的利用」の知、この知の「最高段階, 王冠」が成り立つ。第一の知は経験に適う知、かくあると知る知である。第二は、原因を問う場合知られる認識に適った知、第三は、結果の多様な変異がいかにより得るかを知らる概念に適った知である。

こうした知の段階論が学び論に応用される。

我々人間が事物を学ぶその学び方には3種類ある。

①「感覚」で所有することで、「事物そのものから学ぶ。②感覚で確認されたことを「悟性で研究する」ことで、「我々から」(自分)から学ぶ。③諸々の確証と帰結に精通することで、「他者から」学ぶ。

学びの原則は次のように整理される。「見て取れることは感覚によって学べ、精神的なものは悟性で学べ、啓示は信仰によって学べ」。

範例、規則、実践的応用という教材配列の段階的教授過程を基礎づける学習の過程は、コメンスキーによれば要するに「理論」(theoria)から「実践」(praxis)を経て「有用(有益)」(chresis)に至る知の発展段階¹⁷⁾に対応するということである。感覚的経験で始まり、理性による加工消化を経て行為での有用に至る学習の過程と、その教授過程とは照応している¹⁸⁾。

こうした学習論で注意されるべきは、知の最高段階とされる「有用」の概念である。なぜなら人生の年齢段階にも、理論、実践、有用の段階が平行して対応し得ると見なされるし、老年期自体の学びの範囲内での知の発展にもその三者の展開過程が基本とされるからである。人間の生涯は彼にとって常に叡知の所有と完成を目指す学びをその本質とする。老年期は本来知の頂点をなす「有用」の時期であるといえよう。このChresis概念は(usurpatioの意味がある)理論と実践の真の媒介者であり、物事にそれにふさわしい地位、

場を与えられる応用、有益が意味されている。汎知学の思想との内的関連で言えば、「理論、実践、有用、これは人間の知恵の三段階である」¹⁹⁾。そうしてみると、高齢者を知恵(sapientia)の所有者としての賢者にする鍵はひとえに学びにおけるこの「有用」の段階の成否であるといつて過言ではないであろう。

(3) 老人の学びと教師

老人の学びにも、教師は必要であるとされる。では、それはいかなる教師であろうか。『汎教育』第7章「汎教師」(Pandidascalia)に論じられる教師または教師教育論は、「人間の正しい世話に配慮する人々」

(Pp, VII)を扱うが、世界=学校、生涯=学びの命題を重視した場合、厳密に言えば、教師よりも「指導者」の構想であるといわねばならないであろう²⁰⁾。人の世界、生涯は生徒の役割をとる学校、学習にとどまらない学びの場である。それは、すべての他者の啓発、導きのなされる生活である。ただこの実現は「叡知の最終時点」で可能とされるべきものである。学校で修得した知恵は教科書に保存すればそれでよいものではない。胸のうちに蔵し、行いに証明されるものである。換言すれば「生徒の精神、心、言語、手」が醇化される必要がある。教科書は、「急いで叡知に到達するための車、船」であるが、ただ読むためのものではなく、その内容を「正しく理解し」「記憶に刻み、」「行為に」至らせるものである。この全ての現実化が知恵の最終時点で可能とされる。このためその課題は「全体の真の教師による導きを必要とする」(Pp, VII, 1)。この指導は、「汎教育の学者、汎教育学博士」(Pp, VII, 2)または「キリストの任じた使徒」に留保されるのである。

勿論生徒を叡知へと導く能力のある人々も現存する。真の教師はそこから選ばれ得る。その場合、教師像に前提条件がある。まず生徒がなるべき人間像を有すること、生徒をそこへと連れて行く「術」を統轄すること、熱意を持って人間形成の仕事に当たり得ること。この「精選された人間教育者」は、「敬虔、立派、真剣、熱意、勤勉、伶俐」な人柄の人物である。その上望むべきは「啓発、穏和、信心深さ、神聖」である。教育活動が成果を得るために、教師は「その仕事の課題と目標を知り、それに必要な方法全部、教育方法の豊かな知識を持たねばならない」とされる。教授術に必要とされるのは、全体を教え得るための、「普遍性への見識」, 「確実な方法で確実に目標に至る簡素さ、学びを遊戯のように楽しく愉快にする潑刺さ, spontaneitas」(Pp, VII, 8)である。

さて、学校で育成されるのは、「精神、言語、手」の能力である。彼にとって人間の本質的働きは、認識・

意欲・活動の能力に集約される。従って、「知る、意欲する、できる」(Pp, VII, 17) 人間の形成がめざされる²¹⁾。そのため指導者は、事物の洞察、これに基づく言葉による談論、そして活動、これらに有能でなければならぬ。そうして初めて「他者を教えるに至る」。(Pp, VII, 16)

「根本的に教える」上での原則は、「例、規則、練習を相互に関連づけることである。」「例」がなければ、学習は辛いだけだし、「規則」がないと、順序立てて学べないし、「応用」なくして何も強固にならないからである。事物は耳から眼を通して手に移行する。これを考慮する学習はまず事物に直線的に向かって進み、次に洞察力へと浸透させ、更に事物への見識を利用する実践へすすむ過程を辿る。こうした知の過程は、感覚の能力を導く「例」、事物を導く「厳密な規則」、そして「繰り返しの実験や厳密な練習」の教授過程として意味づけられる。

徹底した教えは、事象の「分析」(Analysis)「総合」(Synthesis)「結合」(Synthesis)を関連づけた「完璧な方法の適用」で成立する。(Pp, VII, 16) 現実的な知の基本はまず「全体をその部分へと分解すること」である。この区別する仕方には3種類ある。ある全体の、他の全体からの分離 (distinctio)、全体の、個別への分割 (partitio)、種類別への全体の細分化 (distributio) である。総合とは、「諸部分の、それに適う全体への再合成」のことである。部分が何に有用であるかは、正しい相互の関連付け、秩序化によって初めて知られる。結合は、部分を部分と、全体を全体と「比較」することである。[この比較の方法には、全体は全体と照応するとする汎調和の前提に立つ一種の同型説 (Isomorphie) がそこには窺われる。Pp, VII, 16, 註参照]

こうして教えによってめざされるのはその全てが「完璧に学ばれる」ことである (Pp, VII, 17)。この学びの深化の過程は、「汎教育」では次のように要約される。「全ては、理論、実践、有用により、或いは規則、例、応用により、さらにはわずかだが明確な規則、事象に適った多くの例、稔り多い実際的应用により、熟達、habitus に至る迄学ばねばならない」(Pp, VII, 22)。学びと平行した教えの発展構造は、知識論の範疇で Theoria, Praxis, Chresis の関連性として基礎づけられている²²⁾。

さらに注目されるのは、段階的に順序立った教え、また各年齢に応じて何が学び知るに適するかの視点、「年齢段階」を考慮することの重要性が説かれる点にある。(Pp, VII, 34) 発達心理学の範疇はなお知られていないが、知る (scire) を少年期、認識 [洞察]

する (intelligere) を青年期、利用する (uti) を壮年期と対応させた箇所 (Pp, XI) もある。「汎教師」に明示されるのは、3種類の知の形態である。感覚に提示され、映像で刻印される事物の知=「直観の知」、量、色、時と所の比較を通して同一物か否かを考量する合理的推論の端緒=「比較の知」、全ての事象を事象界の理念のもとで認識し、どれほど理念界の完全性からそれるか (プラトンのイデア離在説)、判断する「理念の知」である。この三者は図式的に発達段階と照応する。これらの認識のなかでも理念の知は、「最高で最終」の段階に置かれる。コメンスキーによると、「個別知」は幼少年期に、「比較知」は青年期と若年期に、「理念に与る全事物の知」は老年期に対応する。「たとえ包み隠さず、映像で、あるいはたとえ話を通して開陳されようと、結局事物についての完全な判断は老年期につくりあげられる」(Pp, VII, 34, NB)。年齢段階を考慮した教授の前提条件は、こうした「事象認識の三段階」に完全に通じることである。とりわけ高齢者の知的判断の到達段階は「理念の知」にある。その知恵は心像や比喩の形態での事物の完全な判断の表現と、「知る、洞察 (認識) する、利用する」の発展連関における有益な行為、Chresis [役立つこと] に発揮される。汎知を所有する賢者の陶冶としての老年の学びも当然発達に応じた思考のこの特性を考慮した相互交渉や指導であることが求められてくる。

結びにかえて

生涯を視野に入れた教育への関心は、すでに『大教授学』第15章「命数を長くする諸基礎」(Dm, XV, 66-70) にみられる。そこでの学習課題は、「人生は使い方を知れば長い」として学芸の巨匠との対話、愛知の勧めを説いた古代ローマの文人セネカの影響下にある。生涯の使い方の模範を人物で示し、その「知恵の探究」の規則による実践を教示するコメンスキーの帰結は次のようなものであった。「生涯の長短は、外部的なものに属する。最も豊かな一生とは、なにを指すか。知恵をさとりまで生きること (ad sapientiam vivere) である」(Dm, XV, 6, 67)。最も意義ある人生は、知恵のための学びである。勿論その関心事は汎知の学習、「全生涯をよく用いる術 (uti)」であり、主に肉体を病気や死から護る健康教育や生活知にあった。高齢期固有の学習内容、「良く死ぬこと」はその視界に登場していない。しかし実務を捨て自然の研究や徳の愛好を勧めたセネカはすでにこう述べていた。「生涯をかけて学ぶべきは死ぬことである」²³⁾。「死ぬことを教えてくれる」学匠との交際こそ、幸福、「美しい老後」

(pulchra senectus) を保証してくれるという訳である。「良く死ぬこと」を老年後期の学びの主題的内容に設定した背景には、このセネカの道徳論との思想的対話ないし世界観的対決があったのは確実である。ただしその問題の扱い方は、実務を離れて徳への道を過去、現在の賢者、即ち哲人との対話にみる人文的、古典学的な教養の勧めとは大幅に異なる。高齡者の生活理想、人格理想、知恵を有する賢者の人間像も、「良く死ぬこと」をめざす学びは形式上「死の稽古」の意味はもつにせよ、プラトンの哲学者論とは全く異なる普遍的人間教育=汎教育で、老年教育の文脈に置かれ、高齡者賢者論として独自に展開される。彼の高齡者の賢者像も、その実例から推測すると、モーセ、イザヤ、エレキゼル、ヨブ、サムエル、ダニエル、土師等主として『旧約聖書』の預言者である。その敬虔な賢者の典型は現世で「最も知恵ある者」、ソロモンである²⁴⁾。勿論彼の汎知学の世界観と人間像がそこに秘められている。

さて老年期の学びの目標と内容は、今日生涯発達の理論で老年・円熟期の発達課題²⁵⁾とされる内容と比べそれほど著しい違いはないともいえよう。その学習内容は、過去を検討して事業や行為を「享受」し、改善やなすべき事業を達成すること、そして「良く死ぬこと」と定められ、年齢段階別の設定である。ただし彼の特色は老年期全体の基本課題を生命の「享有」(fruitio)とした点にある。[シャラー (Klaus Schaller) は成就、満たすこと、達成、希望がかなうことの意味で Erfüllung をそのラテン語にあてた。]²⁶⁾ 彼の本意は「今まで過ごした人生を有益にすること (frui)」にある。その意味で強調されるのは老年期の生活理想としての、病気を防ぐ健康生活と共に、経験知を活用した有為な行い、Chresisの次元での社会的責務を果たす活動である。「老馬は遅からず放免するがよい」(ホラティウス)は、早期の退役の勧めではない。彼には人生の仕事が疾うに完了してしまえばの話でしかない。その意味で老年期に忠告、助言や警告の社会的役割、次世代への技能、知識の文化伝達、後進の育成等、大仕事が残されること、高齡者は賢者の徳を示し、有益な社会的活動に献身し得る事、これは彼には当然の事なのである。

それにしても見逃し得ないのは、学習論である。Theoria - Praxis の関連に収斂された『大教授学』の帰納的・経験的学習法では、Chresis という行為の次元ははまだ明確にされなかった。「汎教育」においてはそれは知の段階論で壮年期、老年期の知の基本性格を規定するものとなっている。感覚・精神的経験から理性の熟慮、意欲と結合した洞察を経て行為に至る

この認識と行動の系列、即ちこの Theoria → Praxis → Chresis の学習過程の連関は、誕生前から高齡期までの年齢段階で捉え直されている。その意味でそれは、生涯の発達の根本的な学びのいわば原型、その統一ある全体の構造を解明した彼独自の試みとも考えられるのである。

【註】

略号

Pp = Johann Amos Comenius, Pampaedia Allertziehung, in deutscher Übersetzung herausgegeben von Klaus Schaller, Sankt Augustin, 1991.

Dm = Didactica Magna, in: Joannes Amos Comenius, Opera Didactica Omnia 1, editio anni 1657 lucis ope expressa, (Abdruck hrsg. v. Tschechoslowakischen Akademie der Wissenschaften 1957.)

- 1) 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、京都1998年94,96頁参照。
- 2) 佐藤令子「コメニウスにおける生涯教育の構想IV」京都橘女子大学『研究紀要』第17号1990年所載99-112頁。同「コメニウスの生涯教育論」、藤田輝夫編『コメニウスの教育思想 - 迷宮から楽園へ -』法律文化社、1991年所載55-75頁。
- 3) Vgl. Radim Palouš, Die Schule der Alten, J. A. Comenius und die Gerontagogik, Düsseldorf, 1979.
- 4) Radim Palouš, a.a.O., S.57-70. また白幡洋三郎監修『大人にならずに成熟する法』中央公論新社2003年57頁。
- 5) ちなみにチェコ語の kmet (老人) は、ラテン語の comes (仲間、連れ、後見人、随行員、教育掛) に由来する。kmet は、語源から「随行者」、「連れ」の意味がある。社会的には、指導的地位にある賢い老人の意味で“Wladika”である。ただし現在のチェコの日常会話では、kmet は低い価値水準にある言葉でしかない。吉凶、運命、神秘に通じた女子言者、占い師の老婆を意味する“vědma”という語も、日常言語から完全に消え、おとぎの国の伝説想像上の存在と化している。(Vgl. R. Palouš, a.a.O. S.58)
- 6) Cf. A. J. Lewin, Geriatric revolution, New York, 1968.
- 7) Cf. E. L. Thorndike, Adult learning, New York, 1928. ソーンダイクによると、この下降は20歳から始まる。また Vgl. H. Loewe, Einführung in die

- Lernpsychologie des Erwachsenenalters, Berlin 1970.
- 8) 塩谷信幸・吉田聡編「アンチエイジングの科学」, 『現代のエスプリ』No.430, 至文堂, 2003年参照。
- 9) 宮城音弥『人間年輪学入門』岩波書店, 1982年40-46頁参照。
- 10) 高橋恵子・波多野誼余夫『生涯発達の心理学』岩波書店, 1990年58頁以下。
- 11) 栗原彬「「老い」とく老いる」のドラマトゥルギー」『老いの発見』1, 「老いの人類史」岩波書店, 1986年所載35頁。
- 12) Vgl. S. Beauvoir, *La Vieillesse*, Paris 1970, S.566. シモーヌ・ド・ボヴォワール, 朝吹三吉訳『老い』下巻, 人文書院1972年636-637頁。老いは, 死よりも生に対立させるべきもので, 「生の滑稽なもじり(パロディ)」と結論される。この否定的見解は生に意味を与える engagement, 実存の投企を展望する。だが問題は死に終わらない生の肯定的側面の存否にあらう。
- 13) Vgl. Radim Palouš, *Die Schule der Alten. Comenius und die Gerontagogik*, 1979, S.69f.
- 14) 平山正実「ライフサイクルからみた老いの実相」, 無藤隆他編『講座生涯発達心理学-5, 老いることの意味 中年・老年期』金子書房1995年所収172頁。
- 15) 藤田輝夫「コメニウスの初等教育論」, 前掲書『コメニウスの教育思想』1991年所載42頁。
- 16) Gerhard Michel, *Die Welt als Schule. Ratke, Comenius und die didaktische Bewegung*, Hannover, 1978, S.200.
- 17) 太田光一「コメニウスの哲学思想」, 前掲書『コメニウスの教育思想』所載, 179頁参照。
- 18) Vgl. Gerhard Michel, a.a.O. S.202.
- 19) Klaus Schaller, *Die Pädagogik der "Mahnrufe des Elias". Das Lebenswerk des J. A. Comenius zwischen Politik und Pädagogik*, Kastellaun, 1978, S.44f.
- 20) Vgl. Gerhard Michel, a.a.O., S.209.
- 21) 太田光一, 前掲書175頁。
- 22) Vgl. Gerhard Michel, a.a.O., S.175.
- 23) Seneca, *De brevitae vitae*. in: *Moral Essays II*. (The Loeb Classical Library), with an English translated by John W. Basore in 3 Volumes, II. London, 1932, p.300. "tota vita descendum est mori" セネカ, 茂手木元蔵訳『人生の短さについて』岩波書店, 1991年22頁。
- 24) 尤も, 生ける範例で人類を救済に導くのは, 知恵の神, この「永遠の教師」である。「汎教育」の結びは「永遠の知恵への祈り」である。(Pp, XVI.)
- 25) ①老化にともなう身体的変化に対する対応, ②新しい役割と活動へのエネルギーの再方向づけ, ③自己の人生の受容, ④死にたいする見方の発達。柴田・芳賀・長田・古谷野編著『老年学入門』川島書店, 1993年35頁参照。
- 26) *fruitio* は *fruor* (利用する, 享受する, 楽しむ) や *frui* (不定詞) と関連し, 享有, 収益を意味する。

【参考文献】

- 思想の科学研究会<老いの会>編著『老いの万華鏡』お茶の水書房, 1987年。
- 無藤隆他企画編集『講座生涯発達心理学』全5巻, 金子書房, 1995年。